第四回The World Meeting of Popular Movements　教皇フランシスコ メッセージ

米国カリフォルニア州　Modesto

2017年2月10日

原文は[ここ](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/messages/pont-messages/2017/documents/papa-francesco_20170210_movimenti-popolari-modesto.html)　半訳　by齋藤　20191113

（日本語では意味のとり難い箇所を赤字で示した。）

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、

何よりも祝辞を陳べたいと思います。これまでの三回のWMPMで得られた成果を、（訳補遺：米国の）a national levelに再現した皆さんの努力に祝辞を陳べます。またこのメッセージを通じて私は、皆さん一人一人を励まし力づけたい。皆さんの有機的組織体そして同胞達が、“Land, Work and Housing,” the three T’s in Spanish: *Tierra, Trabajo y Techo*のために日夜奮闘して下さっています。これら全てにご苦労様ありがとうの祝辞を送ります。

the Catholic Campaign for Human Developmentの皆さんにも感謝します。議長David Talley司教、ホスト役Stephen Blaire司教Armando Ochoa司教Jaime Soto司教のお三方から心のこもった支援を受け、今回の会合が実現する運びとなりました。そしてタークソン枢機卿、ありがとう。あなたの継続的支援により、新たに高次統合人類発展市民評議会（Dicastery for the Promotion of Integral Human Development）が生まれ、popular movementsが促進されました。皆さんが一緒になって努力しsocial justice に向かって進んでいる。これは私をとても幸せにします。この様な建設的なエネルギーが全ての教区に広がるのを、私は待ち望んでいます。そうなれば、peoplesとindividualsの間に橋を架けることが出来るからです。この様な橋が、排斥、無関心、人種差別、不寛容といった数々の壁を乗り越えさせてくれるからです。

当会合を主催してくれたthe PICO National Networkと、諸々の共催組織の方々のご尽力にも賛辞を送ります。PICOとは、“People Improving Communities through Organizing”のことだと知りました。なんと大規模な化学反応が起こったことでしょう。隣人達と協調し、地域に根ざし、自分達で有機的組織を作り、自分達のcommunitiesを盛り立てる。そういった諸々のpopular movementsに課されたmissionが、ここに大規模に組み合わさっています。

ローマで数ヶ月前開催された第3回WMPMで私たちは、壁と恐怖、橋と愛について話し合いました[[[1]](#endnote-2)]。再度の言及は控えますが、私達の心の奥底にある価値観が試されています。

これらの社会問題は昨日今日始まったものではありません。危機が蔓延していく状況は長い間私たちの目の前にあります。つまり、或る種の社会経済システムが、ただ少数富裕者の特権を守るためだけに、金銭の虐政支配を密かに維持し、人類家族に尋常でない苦しみを与え続け、更に、people’s dignityとour Common Homeを痛め続けています。「今の時代、人類は歴史の転換点を生きています。」[[[2]](#endnote-3)]

キリスト者あるいはall people of good willとして、私たちは今正に生き行動しなければなりません。これは「重大な応答責任です。なぜなら、今現在確定してしまったrealitiesについて適切な解決が見いだされなければ、非人間化プロセスが取り返しのつかないほど始動してしまうからです。」[[[3]](#endnote-4)]　これらは*時の印*です。行動を開始するために認識すべき時の印です。既に私たちは多くの貴重な時間を浪費してしまいました。この非人間化プロセスに十分な注意を払うべきタイミングを失い、この破壊的realitiesを解消できる機会を逃してしまいました。事ここに及んでこの非人間化プロセスは加速を始めてしまいました。この歴史の転換点を越えてとるべき方向、この日増しに悪化する危機を解決する方法、それはpeople’s involvement and participation（peopleが社会参加し関与すること）によって、つまり、貴方方popular movementsを主体として決定されます。

恐怖のために凍りつく、あるいは、紛争に巻き込まれ身動きできない、そうであってはなりません。確かに危険を察知するのは必要です。しかし善き融合の前には前触れとして必ずcrisis（危機）が巡ってくるものです。中国語の漢字はこのgreat peopleが持つ先祖からの知恵を上手く表します。ここでは”crisis”を、二つの表意文字、”danger”を表す「危」と”opportunity”を表す「機」で表現します。

隣人達をないがしろにするのは｢機｣を伴わない｢危｣、致命的なdangerです。もしそんなことをすれば、私たちはそうと気づかないうちに彼らの人間性を否定し私たち自身の人間性も否定することになります。つまりイエスの重要な教えを否定し自分達自身を否定することになります。この非人間化にはdangerが確かにあります。しかしながらここに私たちはopportunityをも見いだすことができます。闇夜に輝く雷のハッとする輝（かがやき）の様に、隣人愛がこの地上世界を照らします。私たちを目覚めさせ、真の人間性がホンモノの抵抗・強靭・忍耐となって一気に出現します。

ルカ福音書（10:25-37）にある、或る律法学者がイエスに問うた質問が、今私たちの耳にも響きます。「私の隣人とは誰のことですか？」自分を愛すように愛すべき他者とは誰のことですか？ 恐らくこの質問者は、日常的に実行できる答えが都合良く返ってくると期待していたのでしょう。「私の親戚ですか？　同邦者？　同じ宗派の者？…」　当時、宗教的に穢（けが）れた者とされた異邦人や外国人を愛するobligation（宗教的義務）をイエスが免除してくれるものと彼らは期待していました。「隣人」「非隣人」、つまり、隣人となり得る者と隣人となり得ない者とに他者を区別することを許す自分達のルールを明確に認めてくれると期待していました。[[4]](#endnote-5)

イエスは例え話で答えます。当時の権威を持つとされた二人と、穢れた異邦人外国人とされた一人のサマリア人からなる例え話です。エルサレムからエリコへの道すがら、一人の祭司と一人のレビ人が、死にかけた者に遭遇します。追い剥ぎに襲われ丸裸にされて見捨てられ死にかけた者に遭遇します。この様な状況で主の律法は助けの手を差し伸べるduty（法律的義務）を課しますが、この二人は立ち止まりもせず通り過ぎてしまいます。彼らは先を急いでいたのでしょう。しかしながらこれら二人の権威者と異なり、このサマリア人は立ち止まりました。えっ、サマリア人が何故に…。と、言いますのは、当時サマリア人は軽蔑されていたからです。誰もサマリア人を頼りにしません。いずれにせよこのサマリア人だって何か急用があって先を急いでいたのかもしれません。しかしながらこのサマリア人はこの死にかけた者を見たとき、祭事に関わる他の二人と異なり通り過ぎませんでした。そうではなく「彼を見てcompassion（同情、共に受難すること）を感じた」（ルカ 10:35）。このサマリア人はtrue mercyをもって行動したのです。傷口に包帯を巻いてやり宿屋までこの傷者を運びました。personallyに彼をケアし宿泊費・治療費を用立ててやりました。この例え話は、compassion, loveが単なるぼんやりした気持ちとは違うことを私たちに教えています。むしろそれは、代金をその人に代わってpersonallyに払ってあげるほどに他者をケアすることを意味します。即ち、当該他者は自分と同一であるというところまで当該他者を「近くに引き寄せる」ために必要なstepsを、自ら全て引き受けることを意味します。「汝(なんじ)自らの如く、汝の隣人を愛せ。」これが主の教えです。[[[5]](#endnote-6)]

現行経済システムは、お金の神を中心に据えています。そして時に、この善きサマリア人の例え話に出てくる追い剥ぎの様に残忍に振る舞います。犯罪と見なされないギリギリの所まで人に危害を加えます。社会がグローバル化しているので、偽りの無実を装うことも間々あります。politically correct or ideologically fashionableという偽りの姿の下に、困難にあえぐ者達に敢えて触れないようにする。即ち困窮者達のことはテレビで生中継されるので、遠回しの婉曲表現と上辺だけの忍耐で話題にすることはします。しかし、この社会的傷口を癒すために何か行おうとしません。これほど多くの兄弟姉妹を置き去りにする現行社会構造に立ち向かおうともしません。この偽善の考え方は、先述のサマリア人とは余りにも違います。人間性へのtrue commitmentが欠如していることをさらけ出しています。

いずれ幻の姿は消えて、無関心によるこの倫理欠如が白日の下にさらされます。社会的傷口が現にあり、これがa realityだと分かります。即ち現行社会経済システムの、高い失業率はrealであり、暴力はrealであり、腐敗はrealであり、それが招くidentity crisisはrealであり、democracyの内蔵抜きはrealです。この様に現行社会経済システムの壊疽は進み、そのいい子ぶりっこは長続きしません。なぜなら近いうちにその悪臭が強くなりすぎて、壊疽があることを隠せなくなるからです。すると今度は、この社会状態を招いた同じ力が、恐怖・社会不安・紛争、更にpeopleの正当な義憤さえも操り、この社会病態を招いた責任を”non-neighbor”に転嫁しようとします。誰か特別な人のことを言っているのではありません。この地上世界のそこかしこに花開いた社会政治プロセスがその末路で、この様に人間性に深刻な危害を加えると言っているのです。

イエスは別の道を教えます。誰が隣人で誰が隣人でないなどと、他者を区別してはならない。困っている誰かに貴方が遭遇したなら、どの場合もその人の隣人となる。心にcompassionを持つなら、他者と苦しみを共にするcapacityを持つなら、そうできるはずだ、と。だから率先して善きサマリア人の一人になる。次に宿屋の主人になる。善きサマリア人が、苦しんでいる者を託した、例え話の後半に出てくる宿屋の主人になる。宿屋の主人とは誰でしょうか？　そう、the Church、キリスト者共同体、people of compassion and solidarity、social organizationsです。つまり私たち、貴方たち一人一人。主なるイエスは私たちに、身も心も苦しむ者達を託します。だから私たちは彼らに、イエスの無限のmisericordiaと救済の全てを注ぎます。ここにこそホンモノの人間性の根源があり、お仕着せの無関心・偽善・不寛容をまとった非人間化を押しとどめることができるのです。

皆さんは既に、social justiceを求める闘いに自分達をcommitしています。our Sister Mother Earth（地球）を守り、難民移住者達の側に立っている。このことを私は承知しています。皆さんの選択を確かめ、この観点から二つの考察を共有したいと思います。

一つ目は、環境危機がrealであることです。「地球気候システムに不穏な温暖化が今現在観測される、という科学的見解の合意は確固たるものです。」[[[6]](#endnote-7)] 科学は単なる知識の一形態ではありません。それは真実（true）です。確かに、科学が必ずしも「中立」ではない ― 多くの場合、イデオロギーの様々な見解と経済的既得権益を隠し持っていることも真実（true）です。しかしながら、科学を否定しNature（大自然）の声を無視したとき何が起きるかも私たちは心得ています。私自身は、私達に関係する全てのことをCatholics（普遍的事柄）としてとらえています。否定に陥るのは避けましょう。時間的猶予はありません。行動を起こしましょう。今一度皆さんにお願いします。native people、司牧者、政治的リーダーなど様々な背景を持つ皆さん全てが、Creation（被造物、全自然界、地球）を守るようお願いします。

二つ目は、直近のWMPMで共有した考察について、再び言及するのが重要だと感じます。即ちpeopleは誰も犯罪者でなく、religionはどれもテロリストではない、ということです。Christian terrorismはあり得ません。Jewish terrorismもあり得ません。Muslim terrorism もあり得ません。この地上世界にそんなものはあり得ません。peopleは誰も犯罪者でなく、薬物取引者でなく、暴力を行いません。「暴力は、貧困層や更に貧しいpeoplesのせいで起きると非難されますが、機会の不均衡が様々な攻撃や戦争の温床となり、様々なタイミングで爆発を引き起こしているのです。」[[[7]](#endnote-8)] 確かに原理主義者や暴力的個人は、どのpeoplesにもどのreligionsにもいます。更に言えば、外人嫌いやヘイトスピーチが餌（えさ）として撒かれ、それを食べた不寛容の世代が日増しに強くなっています。しかしながら平和を求めて生きる私達は、テロには愛で立ち向かいましょう。

これらの原則を守ると決意し、柔和であることを皆さんにお願いします。決して、廉価だけを求める大衆商品の売り買いのように、これら原則の間でトレードオフをしてはなりません。アッシジの聖フランシスコのように、自分達自身の全てを与えるようにしましょう。憎しみある所に愛の種を蒔き、侮辱のある所に許しの種を蒔き、分裂のある所に和合の種を蒔き、誤りのある所に真実の種を蒔きましょう。[[[8]](#endnote-9)]

どうかご承知おき下さい。私は、皆さんのために祈り、皆さんと共に祈ります。父なる神が皆さんに同伴し皆さんを祝福して下さるよう祈ります。神の愛が注がれ皆さんを守りますように。また皆さん、どうか私のためにも祈って下さい。そして歩み続けて下さい。

*Vatican City, 10 February 2017*

1. [] [*Address* to the 3rd World Meeting of Popular Movements](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2016/november/documents/papa-francesco_20161105_movimenti-popolari.html), Paul VI Audience Hall, 5 November 2016. [↑](#endnote-ref-2)
2. [] [*Evangelii Gaudium*](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/apost_exhortations/documents/papa-francesco_esortazione-ap_20131124_evangelii-gaudium.html)§52 [↑](#endnote-ref-3)
3. [] [*Evangelii Gaudium*](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/apost_exhortations/documents/papa-francesco_esortazione-ap_20131124_evangelii-gaudium.html)§51 [↑](#endnote-ref-4)
4. [] Cf. [General Audience, 27 April 2016](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/audiences/2016/documents/papa-francesco_20160427_udienza-generale.html). [↑](#endnote-ref-5)
5. [] 同上。 [↑](#endnote-ref-6)
6. [] [*Laudato Si’*](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/encyclicals/documents/papa-francesco_20150524_enciclica-laudato-si.html)§23 [↑](#endnote-ref-7)
7. [] [*Evangelii Gaudium*](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/apost_exhortations/documents/papa-francesco_esortazione-ap_20131124_evangelii-gaudium.html)§59 [↑](#endnote-ref-8)
8. [] Cf. St Francis of Assisi, Peace Prayer. [↑](#endnote-ref-9)